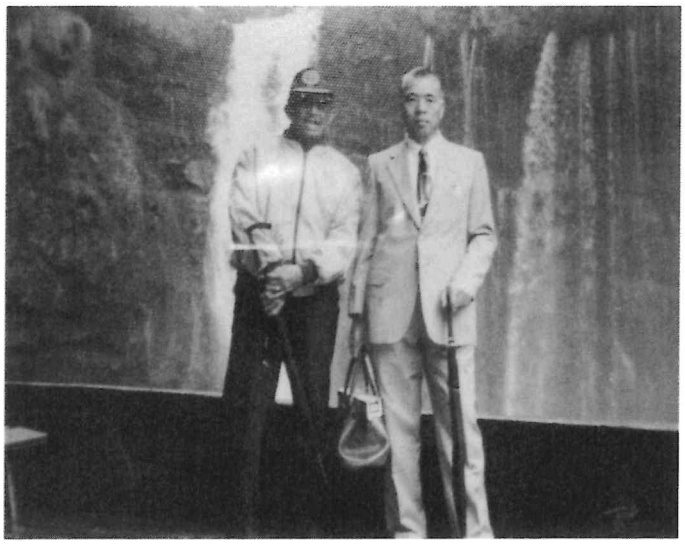
司令官と日本は降伏文書に署名を行う。
しかしその翌日九月三日には、歯舞島に進攻し北海道を目前にして戦闘を停止するのである。
当初の戦略で、北海道への進攻は目と鼻の先にありながら、占守島における予想外のタイムロスにより、この時点で断念せざるを得なかったスターリンの心境は、江戸時代よりロシアが虎視眈々と狙っていた北海道の地が、自国の領土になる寸前で逃してしまったことに、切歯扼腕の思いであったろうことが想像される。
その後スターリンは、千島列島と北海道北部の分割占領を連合軍に申し出ていたが、アメリカに拒否されると、あっさり引っ込めている。


インドネシアNFCC訪日団

占守島の攻防が無ければ、ソ連軍が北海道の地に進攻し、一部占拠という事態になった可能性は高い。
従って北海道分領によるソ連統治が樺太と同じ状態になった可能性も否定できず、現在の日本地図も変っていたのかもしれない。
スターリンは、八月八日、日本に宣戦布告してから一ヶ月弱の間に、千島列島、樺太等を得て領土を拡大したのである。当時、政治家として又、戦略家として、世界の中でも抜きん出た人物であったと思われる。
昭和二十年八月から九月頃、吉留先生は中国装甲総隊(蒋介石率いる国民党)に捕獲接収された武器類、特に車輌（戦車・自動車等）の操縦・整備教育指導を行うこととなる。
この頃支那大陸では、八路軍（後の中国人民解放軍）との内戦が始まっており、国民党にとっては接収した武器をこの戦いにおいて実戦使用することが目的であった。
本来捕虜であった先生は士官待遇で、礼を持って接してくれたそうである。
昭和二十一年五月ごろまで、この任務を行い、六月引き揚げ船で佐世保港に着く。
佐世保港では、酒・たばこ・菓子類の配布と、三百円を支給され、これをリュックに詰め込みその足で宮崎の実家に列車（小林までの切符も渡されたそうである）で向かう。
実家に着くと末っ子が「変なおじさんが来たよ」と言って迎えてくれたそうである。
先生は兄弟が多く、末っ子とは三、四歳の時に家を出て以来であったとのことで、先生の顔もよく覚えていなかったのであろう。
早々仏前にてご先祖へ帰郷報告を行い、父親と対面しながらの話で、亡くなられた兄弟が居たことを知らされたそうである。
そして先生の今後の生き方に、父親から言われたことは、
「おまえは生きて帰ってきたのだから、世界の一等国になるよう、国のために尽くしなさい。それが天皇陛下に尽くすことにも、なるのだから」という言葉であったそうである。
帰国後最初に行ったことは戦没者慰霊のため、全国に祀られている神社に参詣行脚を行ったとのことである。
この後、宮崎県の関連する仕事に就き働き出してまもなく県の土木部長より、ブルドーザーを降ろしに宮崎駅に行ってくれとの話がきたそうである。
どうして先生が行かなければならないのか聞いてみたところ、駅の構内に米軍払い下げのブルドーザーが貨車に載せられたまま何日も置かれており、構内の貨物運搬が出来ないため困って県に何とかしてもらえないか要請があったそうである。
しかしブルドーザーは米国製のためマニュアルも英語で、ブルドーザーそのものを見るのも初めてということもあって、県でも対応に苦慮していたところ、ブルドーザーは戦車に似ているので戦車を扱った者であれば何とかなるのではないかと探したところ、少年戦車兵学校出身者の吉留先生に白羽の矢が立ったということであった。
先生は「はい、分かりました」と一つ返事で駅に行ってみると、各パーツ毎に分解され台車に載っている、総重量十数トンもあるかと

思われる車体が構内に鎮座していたそうである。

内燃機関のエンジンの構造も基本は戦車と同じで、操縦棹等のレバーも英語ではあったが、原理はこれも戦車と同じ、違うことは砲等が無く、排土板があると言うことだけである。

補助エンジンを始動し、メインエンジンを始動。台車から車体パーツを降ろし各パーツを組み立てて完了。県庁に戻り報告。

後日、部長よりブルドーザーを駅構内に置いておくと困るので、取りに行ってもらいたいという話が来たそうである。

先生は、運転は戦車と変らないのでできるが駅前の公道を走るのに免許も持っていないので無理だと断ったそうである。

すると部長が警察署長を連れてきて、警察が先導するので何とかしてもらいたいと懇願され、それじゃということで駅から県庁まで警察車輌に先導され自走運搬したそうである。

この時沿道に出てきた人達は、ブルドーザーのエンジン音と初めて観る威容に喚声と溜息が上がり、先生も少し凱旋気分のような興奮を覚えたようである。

この話を聞きつけた、福岡県・佐賀県・大分県等から、米軍払い下げのブルドーザー対応に借り出されたとのことである。

これも戦車という戦争のための兵器ではあったものの、これに関わったことが、後に建設省が行う産業開発青年隊の教育につながっていくこととなる。

十代後半で戦争と向き合い、その後人生の殆どを産業開発青年隊の、青年教育に魂を注いだことを想うと戦地から戻って来たとき、父親から聞いた「一等国を目指しなさい」「天皇陛下のために尽くしなさい」このことが、生かされている所以であると心源に染みこませ、迷うことなく生きてこられたのではないかと想う。

吉留先生の幼少時代には、明治二十三年に発布された「教育勅語」（昭和二十三年廃止）が、学校の式典で奉読され、軍隊に於いては明治十五年軍人に諭された軍人勅論を精神教育の基本とし、軍隊でも「軍人勅論」を唱えて理想の軍人像を求め、精神の支柱とした教育が行われていた。

産業開発青年隊整備工場前

いずれも明治政府が行った政策を継承したものである。

現在の日本人は、これらの政策に対し戦争を行うのに必要とされた軍事教育であり、戦争を放棄した日本には必要とされないばかりか、危険な思想教育であるという評価が大勢を占めている。

この教育は明治以降昭和の戦前まで行われていたはずである。

明治五年兵部省を廃し、陸軍省、海軍省を設け明治六年には徴兵令が公布され下級武士を士官にして、一般の兵士は徴募によって集められたが、厳選された人物を採用したため、下級武士の士官であっても、憂国の志士が多く、新しい国軍の組織を作るのに情熱を燃やした。

下士官兵として募集された農漁村の青年も、郷土の名誉を担った青年達で、士官の下級武士より教育を受けた農民兵士は戦闘集団としてだけでなく、武道者として「武道を修めるは敵を倒す為に非ず、己を修めその品性を高めるために修行す」という武士道精神に基づいた教育が、後の精神面における国民水準を高めることに寄与する結果を生んでいる。

武勇を尚び信義を重んじ質実剛健な実践生活を身上とする古武士的軍人が多かったように思う。

将軍や将校、下士官兵にいたるまで兵役の後、村に帰った人達は、村の有志として村民の尊敬を受けるような生活態度を持ち続けていたと思う。

これが、昭和の始めごろになると、精神論も薄らぎ内部の軍紀が徐々に乱れ、昭和五年には五・一五事件、昭和十一年の二・二六事

件など要人暗殺、襲撃が軍関係者によって公然と行われたことは、軍が政治に関わるようになって、軍閥が生まれ派閥抗争が台頭してきたことにより、将校の間で下克上的傾向がはびこり、政治将校が幅を利かせる時代に流れて行ったと思われる。

昭和十六年の開戦以降、軍人は勅論を念頭に置きながら自らの精神保持に努めたであろうし、また支えとして、この精神・武器・肉体が揃って戦力になり戦闘集団と成りえることは、認識していたことであろう。

しかし、いくら軍紀厳正を唱えても、それは下級兵士に対してのことであり、上級者は之を逃れて、恥じなく無責任なことが横行したようである。

連合国軍司令官であったマッカーサーは、日本の歴史、人物史も良く学んでいたようで、「明治の将軍達は、質素で信義に厚く、世論に惑わず、徳を持って忠節を尽くし、部下を慈しんだ。なのに、今回の戦いに於いてこのような将軍が見当たらないのは何故であろうか」。

こんな呟きがあったようである。

この言葉は、正に当時の日本軍の姿を端的に言い表した言葉であると思う。

教育勅語、軍人勅論に在る「統帥権・軍人とは」を除くとそこには、人として如何に生きるべきかと言う一つの指標が示されて居るように思える。

これが公と私に分離することなく、心の基として己を律する規範となっていれば、礼節を正し、信義を重んじ、有事には、国家の行く末に目を向けることの出来る人材が育っていたのではないかと思う。

特に上級士官がこれらのことを念頭に戦いを始めていたのであれば、戦い方も兵の人命に重きを置いた戦い方になったのであろうし、この戦いを早期に決着することが出来たであろうことを思うと、政治家・軍人の本分を全うする人材が育たなかったことを残念に思う。

例えがよくないとは思うが、ソ連のスターリンという、軍事面での戦略家でもあり政治面においても世界を相手にして引けを取らない人物が我が国に一人居てくれたならと思うのは私だけであろうか。

軍隊の中では上級士官の低堕落と言うことばかりでなく、一銭五厘の葉書で召集された者の中には上級者に対する、礼儀の強制、命令服従の強要であるとか、兵器の手入れが悪いといっては、古年兵が難癖を付け、初年兵に私的制裁としての、いじめ・体罰が行われていたようである。

軍隊という、死と向き合った極限状況に自ら進んで入ったのではなく、強制されて死地に立たされた者の精神の置き所が無く、鬱積を発散する形となって行われたことだと思う。

特に戦地での少年戦車兵にとっては、兵長つまり上等兵より階級は上で、下士官である伍長の下に位置することから、上等兵たちより「若造の癖に生意気だ」といろいろ難癖を付けて、いざこざが絶えなかったようであるが、志願して少年戦車兵学校に入り、十代後半に受けた教育の軍人五箇条の勅論を精神の基本として、他に惑わされることなく、志願したときの志を貫いた者が殆どであった様に、戦史からは窺える。

吉留先生は、戦地でのあらゆる情報と、世論に惑わされることなく、自ら捧げるべき自己の在り様、つまり自ら献ずる志をたて、そのことによって心を靖んじる境地を、少年戦車兵学校時代に於いて確たるものとし、その後の生き方に慎独を貫いた人ではなかったのかと思う。

世俗的な世論、地位や名誉等に少しも乱されることなく、国のために忠節を尽くし、信義に厚く質素を旨とする、武士の生き方を忠実に守り通した人であると言える。

このことを確信したのは、吉留先生が晩年になってからのことである。

突然私の家を訪ねられ、

「土橋君、わしゃ少し暇になったんで、いろいろなことをまとめてみたので、君にあげるから読んでみてくれんね」

と資料を差し出され、

「何ですか」と言う問いに、

「人生に役立つか分からんけれど、参考にしてもらえればいい」

とのことであった。

ページ番号をふってあったが、十二ページまでで、最後のページには番号がふってなかった。

順番にめくっていくとどこかで見たような気がする。

内容的には、家庭の在り様、社会の組織とは、親・兄弟・友との在り方などが図も交えて綴られており、番号が無い最後のページは、箇条書きになっており、十二枚の内容を簡潔明瞭に列記してあった。

それは、現代風教育勅語とも言うべき内容

若獅子神社（旧陸軍少年戦車兵学校跡地に建立）

であった。
皇祖、皇宗の内容は、国家・社会に対する公人としての在り様と、私人としての倫理感を表現してあった。
国のために、そして天皇陛下のためにわが身を呈する信念がここに窺える内容であった。
また私に届けられたのは、青年時代に教わった教育が、戦争後の人生においても大きな心の支えとなり、自分自身の生きる方向性を示してくれた価値ある教えであったということの証であり、それを誰かに伝えたいという思いがあったのではないか。
先生が青年隊教育に関わることとなり小平から朝霧に赴任した時より、少年戦車学校の跡地に足繁く通い始めたのではないかと思う。
この跡地に若獅子の塔・若獅子神社・サイパンより帰還した戦車が祀られおり、例祭準備・清掃などの作業、又境内に奥様とコスモスなどの花を植えたりと、施設の守人として半世紀以上の歳月見守ってこられた。
この間、陸上自衛隊富士学校機甲師団の生徒に戦場の体験談を講話し、地元小中学生の学習で戦争について話されるなど、多岐にわたって活動をされていた。
誰かに言われたわけでもなく、褒められるわけでもなく、誇るわけでもなく、ただひたすら体が動く限り、続けていた。
自己の信念を生きている限り貫き通す。
正に武人で無ければできないことである。
吉留先生が亡くなる一週間ほど前の、九月一日と二日の両日病院を訪ね、少し話を聞かせてもらった。
体も衰弱しており、目を覚ましては少し話し、疲れるのか直ぐに眠るという状態ではありましたが、少々会話も出来た。
先生に、
「先生の故郷はどこですか、やはり宮崎の地ですか」
と聞くと、
「第一は、生まれた宮崎の地で、ここは日本の神が降臨した高千穂の地であるから」
「第一と言うことは外にもあるんですか」
この問いに、
「この富士の麓でありその昔、大和の国はこの山を日本の象徴として崇めた唯一不二の山があり、どちらも日本の歴史において、意義深い土地に関係することが出来たことに、ありがたさを感じていますよ」
またしきりに「皆さんに感謝、感謝ですよ」と繰り返しおっしゃった。
「日本を一等国にしたい」と言う思いは、産業開発青年隊の青年が国土復興と、ブラジルを始め、世界各国に雄飛して活躍してもらうことが、自分ひとりの力で実現することよりも、より大きな力となってもらえるという思いから、他の教官よりも教育に注ぐ情熱も強く、妥協の無い教え方であった様に思う。
教え子が先生を尋ね、自慢話を聞くということは、教えたものにとって、教えたことが生かされているという確認と喜びがあり、そのことが自分への満足感と誇りを感じさせてもらえる、ありがたさがある。
この事への感謝の念ではなかったのかと我ながらの理解をした。
先生と最後となった九月二日の会話では
「こんな体になって申し訳ない」
「皆さんに迷惑を駆けて申し訳ないですよ」
という言葉と、
「天皇陛下に本当に申し訳ない」。
この会話が先生と話した最後の言葉であった。
最後の最後まで天皇陛下のために尽くすことが出来なかったことへの悔しさなのか、まだまだ尽くし足りないという無念であったのか、先生に問いただす言葉が出なかった。
その一週間後の、平成三十年九月八日に九十四歳の天命が尽き、人生の終焉を迎えた。
櫻の花よ今少し、一日でも長く散らずにいてほしいと願う想いも叶うことなく、静かに散っていった。

総会・記念式典スナップ

懇親会スナップ

懐かしい顔・声

編集後記

産業開発青年隊ＯＢ会事務局長
菅井文明

六十五周年特集号として発行しました。

記事の編集には、吉留先生の記事も掲載させていただきました。

また、大会の写真も多く活用し、懐かしい素顔を参加できなかった皆様にも見ていただきたく（ＤＶＤも製作）掲載しました。

大会に出席された方の中には、二十年～三十年ぶりに根原の山に登って来た方もおり、思い出深き出会いの場でもありました。ご夫婦で参加された方もおり、感謝しております。

我々の仲間の大半が建設および、建設関連の仕事を生業としておりますが、年々現業から離れ、「青年隊の大会を楽しみにしていますよ」との声も聴かれ嬉しく思います。

平成二十五年太田前国土交通大臣、二十八年には石井国土交通大臣が教育訓練センターを視察され、青年隊のお話をさせていただきました。

富士教育訓練センターも平成三十年九月にすべての施設が完成しました。総工費四十億円、三百五十名（内女子寮四十名）の宿泊が可能となり、新しい人づくりの城として生まれ変わりました。

青年隊の皆様より建て替え支援金として百万円ほど寄付させていただきました。

沢山の支援金ありがとうございました。

富士教育訓練センター専務理事として仕事させていただいております。昭和四十七年度、高等科を卒業、青年隊の思い出を伝えております。ご安心下さい。

大会でのエピソードも沢山有りますが、参加できなかったＯＢからの祝電をご紹介します。

産業開発青年隊創立六十五周年
誠におめでとうございます。
「富士の如く
美しく雄大に尊厳であれ」
「貴様らの不屈の信念をもって理想郷の社会実現の為に大業をはたせ！」
など長沢亮太所長の声が今も聴こえてきます。

この言葉を財産として、大切に私たちは継承して、いつまでも青年隊魂を貫いていきましょう。

産業開発青年隊ＯＢの益々のご発展と、ご参集の皆様方のご活躍を祈念し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

平成三十年十一月二十四日
産業開発青年隊ＯＢ
佐々木　祥二
（昭和五十年高等科測量設計管理課程卒）
（現在は、長野県県会議員）

※大久保俊輝様より、講演のご依頼があればご相談させていただきます。
連絡先：０８０－４２００－９４３９

※懇親会出席歌手うず（ＵＺＵ）鈴木伸二
連絡先：０９０－３４３５－０３０６
イベント等有りましたら、ご依頼お願いします。

（提供／建通新聞社静岡支社）

産業開発青年隊同窓会
65周年式典を開催
富士教育訓練センターで

全国から若者が参加し、戦後復興と国際建設協力を国家的プロジェクトとして推進した産業開発青年隊の同窓会（栗田富夫会長）が11月24日、富士宮市の富士教育訓練センターで65周年記念式典を開いた＝写真。全国各地から同窓生約１００人が集まり、旧友との再会に笑顔で堅い握手を交わした。

式典では、物故者慰霊祭や功労者表彰、記念講演、同会総会が行われた。栗田会長は「日本経済は豊かになったが、人としての情が薄くなっている。痛ましい事件を聞くと、今こそ私たちが学んだ青年隊精神が必要だと強く感じている。この場に来ると昔に戻り、忘れていたことを思い出し、心豊かになる」とあいさつした。

また、来賓の元中央訓練所訓練教官の西田博氏、南米産業開発青年隊協会会長の渡邊進氏、東南アジアブロック会長のティグ・ブディオノ氏が、それぞれの懐かしい思い出話しを交えながら、祝辞を述べた。その他、多大な貢献のあった光森徳雄氏、伊達徹氏、福岡功和氏に功労者表彰が贈られた。

記念講演では、同隊出身で亜細亜大学の大久保俊輝特任教授が「命をかけて、未来を育てる」をテーマに教師を目指す学生と不登校などの子どもたちと富士山体験する活動を紹介。最後に青年隊綱領を唱和、隊歌を斉唱した。

式典の中で行われた総会では、新会長に鈴木浩明氏（任期・２０１９年４月～）を選出した。

青年隊ＯＢ会報
産業開発青年隊創立六十五周年
記念大会特集号
令和元年七月発行
発行者　産業開発青年隊同窓会
発行責任者　鈴木　浩明
編集担当　菅井　文明
事務局　富士教育訓練センター内
静岡県富士宮市根原字宝山四九二－八
ＴＥＬ　〇五四四＜五二＞〇九六八
ＦＡＸ　〇五四四＜五二＞一三三六

懇親会スナップ

よみがえる 若き日々

夫婦デュエット／ＵＺＵ(うず)が歌を披露

70周年大会での再会誓う